

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330159

研究課題名(和文) 体験談の国際比較研究 - 物語の構造化を用いた計量的アプローチ -

研究課題名(英文) International Comparative Study on Testimony

研究代表者

川端 亮 (KAWABATA, Akira)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：00214677

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円、(間接経費) 3,630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、5段階からなる体験談のモデルを設定し、それぞれ異なる要因を含む16の体験談を調査対象者に提示して、それぞれの体験談を受け入れられるかどうかを尋ねた。日本においては郵送法で、アメリカ合衆国においてはインターネット調査で、それぞれ調査会社のパネルを用いて、実施した。重要な結果は、倫理的教養の体験談は受け入れやすい一方で、超越的な信念を含む体験談は受け入れがたく、レトリックのある体験談は受け入れられ、レトリックのないものは受け入れられにくい。また、属性的な要因はどれも体験談の受容に影響がないことがわかった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have defined the testimony model comprising five steps, prepared sixteen types of testimonies containing different experience factors, showed one to each of our survey respondents, and asked each respondent if the testimony seemed acceptable to him or her. We performed this mail survey in Japan and Internet Survey in the United States through a research company panel.

The significant results are that testimony containing ethical belief is easily accepted but containing super natural belief is hardly accepted, and that testimony with rhetoric is easily accepted but without rhetoric is hardly accepted. And any socio-democratic factors do not influence on acceptance.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：宗教社会学 体験談 国際比較 質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

宗教研究は理論においても実証においても、欧米のキリスト教をベースに発展してきた。欧米の理論的な宗教研究においては、世俗化論や合理的選択理論から欧米の宗教状況が論じられ、一方の実証においては、数十カ国が参加するヨーロッパ価値観調査や世界価値観調査、ISSP (International Social Survey Programme) 調査などによって、宗教の国際比較調査の計量分析が行われてきている。

日本の宗教研究は、このように順調に発展してきた欧米の宗教研究に倣おうとしてきたが、成果はあがっていない。それは、日本の宗教文化は、キリスト教の伝統と大きく異なるためである。基本的な概念、たとえば宗教では最も重要ともいえる「神」、「宗教」、「スピリチュアリティ」という概念すらも大きく異なり、翻訳して等価な用語に置き換えれば同じ概念として用いることができるとは言い難い。このように日本の宗教を世界の宗教研究の中で同じように論じることができないために、世界に通用する日本の宗教研究は少なく、グローバル化が進む世界において、英語で発信するような日本の宗教研究もほとんど見られない。

従来のように宗教意識や宗教行動に対する調査では、この文化や翻訳の壁を乗り越えることは難しい。そこで本研究では、宗教的な体験談をもちいて、この問題にアプローチする。

2. 研究の目的

宗教信者の体験談は、特定の教団の中での信者の回心(入信)の過程、すなわち宗教的ライフヒストリーである。宗教の体験談の研究としては、日本では天照皇大神宮教、大本、妙智會、立正佼成会、天理教、オウム真理教などの教団を対象とした研究など多数あるが、それらは主として、教団内での活動や教団の信仰体系全体の中での信仰強化の解明を課題としてきた。これらの従来の体験談研究は、基本的に個別の教団研究にとどまるものであった。つまり、教団特有の何が書かれ、その特有の記述がどのように信者に影響するのかの問題とされてきた。それは教団ごとに大きく異なり、日本に限定しても教団間の比較すら充分に行いうる枠組みは見いだせない。もちろん、国際比較に耐えるものではない。

大きく考え方を変えると、体験談にはある一定の構造があると見なせるのではないか。つまり一定の構造の中でいくつかの要因を替えることで多様な体験談は成立しているのではないか。そして、その要因の組み合わせに根源的な宗教性が現れるのではないか。体験談をこのようにとらえて対象とすることで、まったく異なって見える唯一神のキリスト教と重層的な多神教的日本の宗教の、教義や行動よりも基底的なレベルでの共通性を

構造化した体験談の中に見いだすことができる。このように考えて、体験談の研究に取り組むことが本研究の目的である。

このような体験談をいくつかの要因を含む構造を持つものにとらえ、体験談がいかに構成されているかというその「構造」を問題とすることで、教団間の比較、さらには国際的な比較が可能となる。この観点に立ち、本研究は、W. Labov や R. Anderson の物語論の観点を取り入れ、体験談の語り構造を日米で共通の枠組みでとらえることを目指す。

本研究では、教団を超えて、国を超えて、宗教的メッセージを伝えるものとして、体験談をとらえ、体験談の共通モデルの構築を目指す。個人的な体験談の構造は、ラボフによると、要約、オリエンテーション、事態の紛糾、評価、結果、結びの6つの部分からなるとしている。これをもとにアンダーソンは、日本の3つの新宗教(善隣會、立正佼成会、宗教真光)の体験談を分析し、要約、オリエンテーション、危機、改善過程、不和、解決や和解、結びの7つの項目があるとした。その中で中心的な部分は、危機、改善過程、不和、解決の4つである。本研究は、これらの研究に基づき、変化の項目を加えて、名前を中立的なものに変えた、「初期状態」「教義に基づく実践」「結果状態」「結果への解釈・認識・満足度」「信仰・信念の変化」の5段階に分けた。

つぎにこの物語的構造(体験談のプロセスを描く普遍的な枠組み)の中で変遷する主要な要因(病気や人間関係、信仰強化など)を特定し、さまざまな要因が変遷してプロセスを形成するという体験談のモデルを作る。

このようにモデル化すれば、いろいろな要因の組み合わせの体験談を提示することができる。基本的にキリスト教に熱心なアメリカ合衆国では、宗教的な体験談は受け入れられ、宗教を警戒する日本においては、宗教の体験談は多くの人に受け入れられない。その中で、どのような構造のどのような要因を持つ体験談であれば、日本においても受け入れられるのかということ、すなわち、日本においても受け入れられる体験談を発見するために、日米で質問紙による比較調査を行うことが本研究の目的となる。多くの人が体験談に反感を持つ日本において、人々が受け入れられる体験談の要因とその組み合わせをあきらかにすることができたならば、信徒と非信徒の間のコミュニケーションや理解が進む可能性があり、ひいては価値観や文化が異なる人々、紛争状態にある人などの相互理解、すなわち、多文化理解や宗教間対話などに資する材料を提供することができる可能性がある。

3. 研究の方法

本研究は、研究に取りかかる以前から数回の予備調査を行って、準備を進めてきた。日本の3つの新宗教教団の教義を1,200字にま

とめた文章とそこから宗教的な表現を一般的な表現に変えた文章を、対象者 300 名に読んでもらい、宗教に対する共感、拒否感を尋ねる Web による質問紙調査、インターネット上から 1,000 の体験談を集め、データベース化し、その中で、特徴的と思われる体験談を 9 つ取り上げ、それに対する共感、拒否感を尋ねる質問紙調査、ネット上で宗教的体験談を語り合い、お互いにその体験談にコメントを付け、評価し、何度も対話する日米での実験的調査などを経て、特定の要因に焦点を絞り、その組み合わせを尽くした体験談を作成し、異なるパターンを調査対象者に読んでもらい、その反応を質問で尋ねる調査方法が有効であることを確認し、その方法をとって、研究を進めることにした。

まず、予備調査として、2012 年の 1 月から 2 月にかけて、アメリカで 1,000 サンプルを回収目標とした予備調査を Web で行った。調査費用の制約で年齢層を限らざるを得ず、調査対象者は、20 歳代後半 (25-29 歳) と 40 歳代後半 (45-49 歳) の男女に限定した。また、同じく調査費用の制約のため、多くの人に尋ねることができなかつたため、まず、信仰区分を問うスクリーニングを行い、「宗教は嫌い」と答えた人を除いて、「信仰あり」、「信仰はないが宗教には関心あり」、「信仰もなく、関心もない」の 3 カテゴリーの人を対象とし、3 カテゴリーが、性別、年齢や後の提示パターンなどで均等になるように割り当て、これらの人を対象に 2 回の質問紙調査を行った。

第 1 回目の調査で、宗教意識や宗教の寛容性についての意識項目と、学歴、職業などの属性を問い、3 週間後に、3 種類の短い体験談を 2 種類のパターンで提示し、体験談に対する共感 / 拒絶などの反応を調査するとともに、体験談提示前 (1 回目調査) と提示後 (2 回目調査) によって、宗教的な考え方に変化がみられるかを確かめた。その結果、2 回の調査によって、変化が捉えられることが分かり、この方法で、2012 年度に日米比較調査を実施することにした。

一方で、予備調査においては、体験談自体を受け入れる、共感するという人が日本においては少なく、共感できる体験談を見いだすことには成功しなかつた。2012 年度には、関連領域の研究者から専門的助言も得て、これまでの予備調査の分析結果も再度検討し、日本人に受け入れられ宗教的体験談はどのようなものかを発見するために調査票を作成した。

調査の方法は、実験計画法やコンジョイント分析とよばれるものに近く、心理学やマーケティングの分野、政策・制度設計の分野ではよく用いられるものの一つであるが、宗教研究で用いられたケースはないと思われる。この調査の特徴は、およそ 1000 字の体験談を提示しそれに対する考えを答えてもらうことにある。この体験談は、実際の体験談

ではなく、実験計画的に体験談中に異なる 4 つの要因を入れ、1 つの要因にそれぞれ 2 つずつのパターンを入れ替えた、 $2 \times 2 \times 2 \times 2$ の 16 パターンの体験談を用意し、それぞれを異なる約 60 名の調査対象者に読んでもらい、それを受け入れられるか、自分の経験と矛盾しないかなどの 15 項目に答える形式であり、いわゆるヴィネット方式の調査である。また、宗教意識については、宗教的な心は大切と思うか、神は万能であるか、運命は変えることができないと思うか、などの 34 項目を尋ねており、日米の宗教意識の違いや体験談を読む前と読んだ後では宗教意識が変化するかどうかも調べられる調査設計になっている。

調査は国際比較調査に実績のある調査会社に委託し、日本とアメリカの 20 歳から 69 歳までの男女を対象に行った。日本の調査対象は、調査会社の郵送パネルを用いて、郵送法で実施し、1,238 の有効回答を得た。アメリカの調査対象は、アメリカの調査会社のオンライン調査パネルを用いて、オンライン調査により、1,084 の有効回答を得た。

4. 研究成果

(1) 本調査研究では、同一対象者に 2 回の調査を行う、パネル調査の方法を採用している。体験談提示前後に同じ宗教意識について質問しているが、体験談を読むことによって、宗教的な考え方は変化すること、その変化についての検討は、信念変更の数理モデルによって解釈可能である、首尾一貫した一定の方向に変化していることがわかった。

(2) 2012 年 1-2 月の予備調査の結果では、日本においては提示された体験談に対して、共感できると肯定的に答える人は少なく、宗教を信じる人が少ない日本では宗教の体験談は受け入れられないと考えざるを得ない結果であったが、提示する体験談に改善を重ねた結果、日本においても共感できると答える体験談を発見することが出来た。それは、体験談にレトリックがあること、超越的な教えの内容を含まず、倫理的な内容であること、信仰によって救われ、その結果も信仰を続けるという首尾一貫した内容の体験談であった。

(3) 1 つ 1 つの要因では、まず、超越的な教えを含む例として「根源的な生命力」で救われるというような体験談は受け入れられず、「人間の心のあり方」によって幸不幸が決まるというような体験談、すなわち超越的ではなく倫理的な教えの体験談が受け入れられる。つぎに非常に短く余計な修飾語を省いたレトリックのない体験談は受け入れられず、具体的な様相を描いたレトリックの利いた体験談が受け入れられる。さらに日本においては最終的に信仰をやめたという体験談は、共感を得る。日米の文化的な差異を示す要因として、「運命は変えられると思う」という要因を含めた体験談と、運命については触れ

ていない体験談を準備したが、どちらも有意な差は見られなかった。

(4)宗教を信じる人、宗教的な心が大切だと思う人など、宗教性の高い人は体験談を受け入れる。

(5)属性なども投入して、体験談の共感に対して、重回帰分析を行ったところ、性別や年齢などの属性はまったく有意な効果がないことがわかった。つまり、誰が宗教の話に耳を傾けるかは外見的、属性的にはまったくわからない、予想できないということである。これは、宗教を信じる人の立場からすると、布教の対象として、宗教の話をしてよいターゲットは誰か、ということはまったくわからないということであり、不用意に宗教の話をする、相手に拒絶される可能性が高いということである。

(6)最近うれしいことがあった人は、体験談を受け入れやすい。

(7)アメリカの方が日本よりも体験談を受け入れやすいが、上記の傾向は日本にもアメリカにおいてもあてはまる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

真鍋一史・川端亮・横井桃子、「日本とドイツの宗教意識の比較分析」『青山総合文化政策学』、査読なし、6(1)、2014、pp. 31-55

横井桃子・川端亮、「宗教性の測定 - 国際比較研究を目指して - 」『宗教と社会』、査読有り、19、2013、pp. 79-95

川端亮、「宗教的体験談の受容」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』、査読なし、39、2013、pp. 199-215

弓山達也「宗教系大学の社会貢献とスピリチュアリティの教育」、『聖心女子大学キリスト教文化研究所編』『宗教なしで教育はできるのか』春秋社、査読なし、2013、pp.241-270

弓山達也「宗教者と市民をつなぐ宗教研究」、『CANDANA』、査読なし、251、2012、pp.1-4

弓山達也「いのちの教育とスピリチュアリティ」『学校メンタルヘルス』、査読なし、14(2)、2011、pp.134-137

渡辺光一・黒崎浩行・弓山達也、「日米の宗教概念の構造とその幸福度への効果 - 両国の共通性が示唆する普遍宗教性 - 」『宗教と社会』、査読有り、17、pp. 47-66.

〔学会発表〕(計 4 件)

川端亮「日本における宗教的体験談の受容 - 質問紙調査結果から - 」日本宗教学会第72回学術大会、2013年9月8日、國學院大學

Watanabe, M. and Akira Kawabata, "Narrative Sermon Effects: An Experimental Survey in the US and

Japan." Society for the Scientific Study of Religion and Religious Research Association Annual Meeting 2013. 2013年11月10日、Boston, MA, USA .
Watanabe, M. and Akira Kawabata, "The Measurement Invariance of Religiosity between the U.S. and Japan," Society for the Scientific Study of Religion and Religious Research Association Annual Meeting 2012. 2012年11月9日、Phoenix, AZ, USA.

横井桃子・川端亮「宗教的変数『宗教的な心』は大切である」の有効性」「宗教と社会」学会第20回学術大会、2012年6月17日、長崎国際大学

〔図書〕(計 1 件)

稲場圭信・黒崎浩行、2013、『震災復興と宗教』明石書店、316ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

川端 亮 (KAWABATA, Akira)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：00214677

(2)研究分担者

弓山 達也 (YUMIYAMA, Tatsuya)
大正大学・人間学部・教授
研究者番号：40311998

(3)研究分担者

黒崎 浩行 (KUROSAKI, Hiroyuki)
國學院大學・神道文化学部・准教授
研究者番号：70296789